

# 小学生の自尊感情を育む学級経営のあり方

## —自尊感情が低下する中学年を中心に—

教職実践開発専攻 西田 依子

### 1. 目的と意義

人権教育、道徳教育、国際理解教育などで、「自尊感情」という言葉がよく聞かれる。また、文部科学省の改革のキーワードである「生きる力」にも、自尊感情の理念が含まれている。このような考え方が重要視されるようになった要因として、子どもを取り巻く社会環境の急激な変化の中で、子どもが自分に自信をなくしているという考えが広まったからである。

「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善について（中央教育審議会答申）2008」では、「3 児童たちの現状と課題」の中で、「自分に自信がある子どもが国際的に見て少ない」との文言がある。「第7回世界青少年意識調査報告書」<sup>i</sup>（2004年1月）では、「あなたは自分自身について誇れるものをもっていますか」という設問に対して、日本はすべての項目で韓国、アメリカなど諸外国に比べ低い結果となっている。また、2007年に行われた内閣府の「低年齢少年の生活と意識に関する調査」<sup>ii</sup>では、1999年の同じ調査と比べ「自分に自信がある」と答えた小中学生の割合が低下している。さらに、児童精神科医の古荘純一が2004年に行ったQOL尺度調査<sup>iii</sup>によると、自尊感情は小学校中学年から低下し始め、中学校、高校と低下し続けるという。

これらのことから、日本の子どもの自尊感情は、①他の国に比べて著しく低いこと、②年々低下していること、③小学校中学年から下がり始めその後低下し続けることが明らかとなった。現在、学校現場で問題となっているいじめ・不登校・問題行動・学ぶ意欲の低下なども、この自尊感情の低さが原因であるという指摘も多い。

そこで、本研究では、自尊感情という視点から学級経営を中心とした学校教育について考えた。特に、自尊感情が低下し始める中学年において本研究に取り組むことで、これから迎える思春期を乗り越える力となると考える。

### 2. 自尊感情の定義

池田<sup>iv</sup>は、アメリカでの数多くの研究から、自尊感情を「自分に対する誇りや自分を価値ある存在と思う気持ちのことであり、自己概念のなかでも特に自己に対する正の評価を示すもの」と定義している。また、遠藤<sup>v</sup>は、「自分が価値のある、尊敬されるべき、すぐれた人間であるという感情」（1992）としている。すなわち、自分を価値ある存在であると思う肯定的なものであるととらえられる。

しかし、古荘<sup>vi</sup>によると、「自尊感情が高すぎるというの、対人トラブルが増える可能性がある」「集団の中の一人として考えると、やみくもに高く保つ、あるいは高めることを目標にすると、收拾がつかなくなる」という。前述したように、自尊感情は低すぎることで不登校など様々な問題を引き起こす要因となることが多いが、高すぎると人間関係においてトラブルを引き起こす原因にもなる。自分を価値ある存在であると考えただけではなく、他者を尊重する心をもつことも重要である。

そこで、本稿では、自尊感情を「自分を価値ある存在であると感じ、自己と他者を尊重する気持ち」と定義する。

### 3. 検証方法

自尊感情を「自分を価値ある存在であると感じ、自己と他者を尊重する気持ち」ととらえたことから、効果の検証には、福岡県教育センターが、2004年に作成した自尊感情テスト、他者肯定感・否定感テストを用いた。対象学級の経年変化、さらに非対象学級との比較から効果を検証した。

### 4. 保護者との連携の必要性

池田<sup>Ⅷ</sup>は、自分の身近にいる人が自分を温かく包み込んでくれている、自分を愛してくれているという気持ち、すなわち「包み込まれ感覚」は、自尊感情の基礎にあるものであると言っている。2010年11月に南小学校で行った児童意識調査をクロス集計した結果でも、「お家の人に大切にされている」と感じている子どもは、「友達は自分の意見をしっかりと聞いてくれる」、「勉強は楽しい」「自分のことが好き」（1%有意水準）と感じているということがわかった。他にも、数多くの先行研究、先行実践から、家族の受容的な態度が子どもの自尊感情を育てることが明らかである。つまり、子どもの確かな自尊感情を育むためには、家族に温かく受け入れられているという思いを子どもがしっかりと持つことが重要であるといえる。

そのためには、保護者が自信をもって子育てに望むことが大切であるが、核家族化、地域社会の希薄化、不安定な社会情勢の中、保護者の不安も大きくなり、自信をもって子どもに接することが難しい家庭も多くなっている。そこで、学校と保護者が連携し、子どもの自尊感情を育む必要があると考えた。

### 5. 研究仮説

数多くの先行実践から、ジグソー学習やSFAなど様々なプログラムが子どもの自尊感情を高めることに有効であることは明らかになっているが、それが継続的に行われていない実践が非常に多い。一時的なプログラムはその場での効果が見られても、その後、また自尊感情が低下していく恐れがある。また、前述したように子どもの自尊感情を育むためには、家族の受容的な態度が大切であるということは明らかとなっているものの、学校が家庭と連携し子どもの自尊感情を育てていく実践はほとんどない。

そこで、子どもの自尊感情を育むため、次のような研究仮説を立て実践をすすめた。

学級担任が、全教育活動を通して、保護者と連携して、自尊感情を育む学級経営をすれば、子どもに確かな自尊感情を育むことができるであろう。

### 6. 実践方法と内容

#### (1) 学級経営チェックリストの作成・活用

学童期に達した子どもは、家庭での生活以外のほとんどの時間を学校で過ごし共通の体験をすることになる。そして、それらの体験の中で、教師や仲間などの相互作用を通して、自己概念や自尊感情を形成していく。子どもの自尊感情の形成にとって学校生活がいかに重要であるかがわかる。教師は、子ども一人一人の自尊感情を育むことができるように学級経営をしていくことが大切である。

しかし、教師が個々の生徒に対する期待度によって、無意識にその処遇を決定しているとの説もある。プロフィとグッド<sup>Ⅸ</sup>によると、個々の子どもに対する教師期待のあり方によって、教師行動に大きな違いが見られることがはっきりと示されたという。さらに、このような教師の無意図的な期待行動が、子どもの自己概念の形成・変容に影響を及ぼすことが明らかにされた。すなわち、教師による高い期待は子どもに肯定的な自己概念を形成させ、それが学業達成と学級への適応を促進するのである。逆に低い期待は子どもに否定的な自己概念を形成させ、それが子どもの学業達成と学級への適応を弱めることになるのである。

子ども一人一人への関わりを含め、教師は自分の学級経営を常に見直し、改善していく必要があるが、客観的に見直す指標がないとそれは難しい。また、指標があっても、定期的に自身の学級経営のあり方を見直す機会をもたないと学級経営を改善することは難しく、その結果、子どもの自尊感情を育むことができなくなってしまう。

そこで、子どもの自尊感情を育むため自身の学級経営を見直す指標として「学級経営チェックリスト」を作成した。その作成にあたっては、以下のことに留意した。

#### ①子どもの自尊感情を育む先行研究をふまえること

先行研究から、中学年以降、子どもの自尊感情が低下する要因を以下の3点にまとめた。

- ・客観的な自己理解がすすむため、他者との能力比較から自己を評価する能力が育ち、一部の領域での低い自己認識が全体的な評価に結びつくこと。
- ・能力概念の発達から、自分の有能さ感覚の減少を生み無力感を学習するようになること。
- ・抽象的、概念的な概念になじめず授業が理解できなくなってくること。

そこで、このような発達段階にある中学年児童に対して、先行研究をふまえ次のような自己概念を育てていきたいと考えた。

- ・できていること、得意なことを自覚する。
- ・自分の成長を見つけ、肯定的にとらえる。
- ・努力することで、自分の力はどんどん高まっていくことを実感する。

#### ②先行実践での成果を取り入れること

先行実践の成果から子どもの自尊感情を育むために、次の4点を大切にした。

- ・教師は、子ども一人一人を肯定的、受容的にとらえ、支持的な学級づくりを行うこと。
- ・子どもが自分のよさを自覚でき、他者から認められていると実感できる活動を仕組むこと。
- ・自分の学びを実感できる活動を行うこと。
- ・保護者が受容的な態度で子どもと接することができるように、学校から働きかけること。

#### ③2010年に南小学校全児童、全保護者を対象として行った意識調査で明らかになったことに配慮すること

##### ○児童意識調査から

児童意識調査の結果を学校全体、学年ごとに分析し、自尊感情が低下する要因を探った結果、以下のことに留意することが大切であると考えた。

- ・包み込まれ感覚を育むために、通信や懇談などで児童の自尊感情について共に考える場をもつなど、保護者への啓発を行っていくとともに、4年生以降の保護者には思春期への理解と対応について伝える。
- ・子どもが学業に対して、苦手意識を抱かないようにするため、教師がわかる・できる授業を作り上げていく。
- ・教師は、学力とはテストの点数といった結果だけではなく、目標に向かってコツコツと頑張る過程も大切であることを、子どもだけではなく保護者にも伝える。
- ・教師や保護者が、子どもの努力の足跡を見つけ、認め励まし、努力をすることの素晴らしさを味わわせていく。
- ・「できないところ」ではなく、「できるところ」や「自分のよさや成長」に着目させる働きかけを、教師が保護者とともに行っていく。

##### ○保護者意識調査から

児童の包み込まれ感覚を育むために、保護者意識調査の結果を分析し、保護者が子育てに対して不安を抱いていることに対応していくため、以下のことに留意していく必要があると考えた。

- ・学校便り、学年通信、学級通信を通して子どもの頑張りを家庭に知らせる機会を増やしていく。
- ・保護者の心配事の多くは、低学年は子ども本人にかかわること、中学年は友達関係、高学年は児童の学力であることをふまえ、通信や懇談会の話題に取り上げる。
- ・3年生から5年生の保護者は、自我が芽生えた子どもの対応に苦慮していることを理解し、共感的に保護者の話を聞くとともに学校でのよさを積極的に伝え、家庭で子どもをほめて認める場面をもてるようにしていく。

これらから子どもの自尊感情を育むための教師の構えや手立てを考え、「子どもの自尊感情を育む教師の構え」「子どもの自尊感情を育む学習指導」「子どもの自尊感情を育む生活指導」「保護者との連携のあり方」の4つの場面別に診断項目として示した。その診断項目を、以下のような3段階の評価基準で自己評価した。

1・・・意識できていない
2・・・意識はしているが、取り組めていない。
3・・・意識して取り組んでいる。

本稿では、自尊感情の構成概念を「包み込まれ感覚・社交性感覚・勤勉性感覚・自己受容感覚」ととらえたため、児童意識調査との対応を図ることができるように、学級経営チェックリストの診断項目がどの構成概念を育てるものかについても明らかにした。

教師はこの学級経営チェックリストを基に定期的に自身の学級経営の評価を行い、その結果と児童意識調査の結果を比較検討し、学級経営の課題を見出した。その課題を解決するため、児童観察、保護者との懇談等から手立てを考え、学級経営を改善した。

## (2) 保護者との連携

先行研究、2010年度に南小学校全児童を対象とした意識調査のクロス集計の結果から、自尊感情の基礎は家族の受容的な態度であることは明らかである。そこで、自尊感情の基礎を育むため、児童の学校での頑張りや成長を家庭に伝えたり、自尊感情の重要性や家庭での児童への接し方などを通信や懇談会などで伝えたりした。

## 7. 実践と結果

学級経営チェックリストのそれぞれの構成概念について、教師の自己評価を点数化（意識してできている 3点・意識はしているができていない 2点・意識していない 1点）した平均値は次の通りである。（ ）内の数字は、標準偏差である。

	包み込まれ感覚	社交性感覚	勤勉性感覚	自己受容感覚
4月	2.17 (0.53)	2.40 (0.67)	2.40 (0.50)	2.25 (0.45)
7月	2.41 (0.51)	2.45 (0.52)	2.45 (0.51)	2.25 (0.45)
11月	2.64 (0.49)	2.63 (0.50)	2.72 (0.46)	2.92 (0.29)

11月には、学級経営チェックリストのすべての構成概念の平均値が上がっていることから、教師は定期的に学級経営チェックリストで、自分の学級経営を見直すことによって、それを意識して学級経営を行うことができるようになってきたことがわかる。

一方、児童意識調査の平均値の推移は、下表の通りである。表中の数字は、それぞれの質問項目に対して肯定的な回答をした合計を平均した値である。（ ）内の数字は、4月：3年生11月との比較、7月：4月、11月：7月との比較である。

	包み込まれ感覚	社交性感覚	勤勉性感覚	自己受容感覚
3年	73.3%	61.6%	68.8%	73.7%
4年4月	75.8% (2.2)	65.0% (3.4)	63.5% (-5.3)	73.4% (-0.3)
4年7月	69.6% (-6.2)	62.3% (-2.7)	61.8% (-1.7)	67.2% (-6.2)
4年11月	72.4% (2.8)	66.6% (4.3)	62.1% (0.3)	73.9% (6.7)

子どもの自尊感情を育むため、学級経営チェックリストの評価と児童意識調査結果から、以下のように学級経営を改善してきた。構成概念ごとに示す。

### (1) 包み込まれ感覚

子どもの包み込まれ感覚を育むため、次のように保護者と連携を図った。

### ①学年通信での啓発

従来、学年通信の内容は月初めに、行事予定や学習予定を知らせるなど事務的な内容がそのほとんどを占めていた。しかし、本研究では、それとは別に自尊感情を育むために大切なことや家庭での子どもへの接し方についての内容を伝える学年通信を定期的に発行した。このことで、保護者の子育てへの関心を高め子どもへの接し方を振り返るきっかけを作ることができた。また、保護者との懇談や子どもの発達段階から、思春期への対応を学年通信の話題として取り上げるなど、タイムリーに話題を提供できたことも効果的であったと考える。

11月の保護者意識調査の自由記述には以下のような意見があった。

『自分の悩んでいる事が学年通信に載っていたりすると「自分だけではないんだ・・・」と安心したり、それを通じて他の保護者の方と話ができたりします』

『学年・学級通信を楽しみに見えています。今、どんな事を大切に子育てをすればいいのか、子どもにどんなアドバイスをしてあげればいいのかなど考える時があるのですが、通信を見て勉強になっています』

この他にも、保護者意識調査の自由記述の欄には、59人中6人から、学年通信が役立っているとの回答があった。

### ②一人一人のよさや成長を保護者に伝える。

7月の児童意識調査では、学級経営チェックリストの結果から、教師は包み込まれ感覚を意識して学級経営を行うことができたとして自己評価しているにも関わらず、子どものそれは著しく低下した。教師はその意識のずれに注目し、児童観察や保護者との懇談内容から改善策を考えた。

すると、個人懇談で保護者から、「先生、学級通信で素晴らしいみんなの素晴らしい姿が紹介されていますが、うちの子はみんなと一緒に取り組んでいるのでしょうか」という声が聞かれた。保護者の中には、学級通信や学年通信で伝えたことと自分の児童や自分自身を比べ、不安になることがあるということが懇談から明らかとなった。

そこで、2学期以降、学級通信、学年通信での啓発だけではなく、子ども一人一人の成長やよさを本人にメッセージカードとして伝えるようにした。学級通信のように学級全体の成長ではなく、一人一人に向けたメッセージであるため、保護者も子どもの成長をしっかりと受け止めることができるようになった。そのメッセージカードに対して返事を書いてくださる保護者も多く、担任と保護者が思いを共有することにもつながった。

メッセージカードへの返事として保護者から頂いた手紙には、次のようなものがあった。

『仕事では褒めて褒めての保育をしているのに、我が子にはつつい厳しい目となってしまい……。こうやって、先生方、友だちに認めて頂き、我が子は成長しているんだなと感謝しております』

『2学期になり、息子が色々なことに今まで以上にはりきり、自信をもって取り組む姿、嬉しく思っています。あの通り、なかなか自分からアピールすることがない息子ですが、先生がよく見てくださり、ピンポイントでほめてくださるので、「よし、頑張るぞ」と意欲につながっているのだと思います』

このように、全体への啓発と同時に、個への認め励ましをすることで、保護者は我が子の成長を実感し、受容的な態度で接することができるようになったと考える。そのことが、子どもの包み込まれ感覚を高めることにつながり、11月の児童意識調査の包み込まれ感覚が高まったと考える。

## (2) 社交性感覚

中学年にとって友達との関係はこれまで以上に難しく、大切になってくることをふまえ、教師は社交性感覚を意識して学級経営に取り組んできた。他の構成概念と比較しても、学級経営チェックリストの平均値が高いことから、それをしっかりと意識して学級経営に取り組んでいるということがわかる。

しかし、7月の児童意識調査の結果から、「友達の言いなりになってしまう」「友達は私の意見をしっかりと聞いてくれる」という質問項目での低下が著しいことから、友達との関係に悩み始めた子どもの姿が見え

てきた。そこで、2学期以降、正しい友達観を育てたり、運動会を核として仲間の素晴らしさを味わうことができるようにしたりした。社交性感覚を育むため行った実践を以下に示す。

#### ①全教育活動で仲間の成長を見つけ合う活動を取り入れる。

帰りの会などで、学級や個人の成長を認め合う時間をもつことは多くの学級が行っている。しかし、そのような活動では認められる子が偏ることが多い。また、仲間の成長を見つけられることができる児童も偏り、全員でよさを見つけ認め合うことは難しい。全員で仲間の成長を見つけ合い、全員が認められてこそ、社交性感覚を育み、他者を肯定する心も育つと考えた。

そこで、帰りの会では、学級だけではなく、班内で一人一人の成長を見つけあう時間を設けた。また、授業でも作品交流会などを多く位置づけ、そのよさをメッセージカードとして相手に届けるなど、仲間の頑張りをを見つけ認め合う場を多く設けた。そのことで、仲間の成長を見つける目も育ち、全員でよさを認め合うこともできるようになった。

帰りの会での「輝き見つけ」に対する感想を書いた子どもの生活ノートである。

『帰りの会で輝き見つけをやっていました。私は、これをやる前は人の悪いところばかりを見つけて先生に言いつけてばかりでした。でも、輝き見つけを始めてから仲間のよいところをたくさん見つけられるようになりました。(中略) 私はよいことを見つけて、みんなだれにだってよいところがあることがわかりました。だから、「あの子は苦手」と決めつけるのはやめたいと思いました』

#### ②教師が媒介し、仲間同士でよさを伝え合う。

授業中や帰りの会の時間に、仲間同士でよさや成長点を見つけあい認め合うことだけではなく、教育相談アンケートや生活ノートに児童が書いてきた仲間のよさを書かれた本人に伝えるようにした。そのことで、仲間が自分の頑張りを認めてくれるという思いを高め、他者肯定感を高めることにもつながった。

#### ③学校行事を活用し、仲間と協力することの素晴らしさを味わわせる。

仲間と協力することの素晴らしさを実感させるために、学校行事を学級経営の核として位置づけ活用した。例えば運動会では、取り組みに入る前に、運動会を通してどんな力を身につけたいかを学級全員で考え、運動会実行委員を募って、自分たちの力で目的を達成できるようにした。教師は児童の取り組みを観察し、取り組みへの意欲が低下したところで学級活動を仕組み、仲間と団結するとはどんな姿なのかを考えることができるようにした。このように、行事を学級の自治力を高めるものとして位置づけ、話し合いを通してやりきることができるようにさせることで、仲間と支え合う素晴らしさを体得させることができた。

運動会の中間反省後の子どもの生活ノートには、次のような意見があった。

『話し合いで実行委員の子の涙を見ているのがつらかったです。一生懸命、みんなのためにやってくれている人が涙を流すのは見ていてつらかったです。だから、これから実行委員の気持ちに応えられるフォローになっていきたいです』

『話し合いをして、みんなの気持ちがよくわかりました。3時間目が終わると、みんなはいっせいに教室を出て階段を下りていきました。台風の目でこけてしまってもすぐに立ち直り走っていました。私たち実行委員はとてうれしかったです』

全員が認め、認められる場をもつこと、学校行事を子どもが主体となって取り組むことができるように支援することで、社交性感覚を育むことができたと考ええる。

### (3) 勤勉性感覚

4年生では、学習内容が難しくなることから勤勉性感覚が大きく低下することが、先行研究、2010年の児童意識調査から明らかとなっている。本研究でも、4月の児童意識調査で3年生までと比べ否定的な回答をする子どもが著しく増えている。その結果を受けて、教師は、勤勉性感覚を高めるため、学級経営チェックリストにある「努力することで自分の力は高まっていくこと」「学習規律の定着」「授業中、発言の機会を多くすること」「学力とは結果だけではないことを伝えること」を、学級経営の中で意識して行った。学業成

績ではなく、それに向かって努力することがいかに大切かについて伝え、努力できた子を大きく認め励ました。

このように勤勉性感覚を意識して学級経営を行った結果、子どもの勤勉性感覚は大きく低下しなかった。その要因として、次の実践が効果的であったと考える。

#### ①学習規律の定着を促す。

反応しながら仲間や教師の話聞くことは、自分の集中力を増すこと、仲間が話しやすい雰囲気を作るために大切であることを話し、聞く姿勢が徹底するように粘り強く働きかけた。また、自分の思いを相手にしっかりと伝えることは、自分の考えをまとめる力を育てるだけではなく、これから社会に出た時に必要となる力であることを繰り返し話し、話す意欲を高めた。さらに、話す・聞く姿勢を常に振り返ることができるように、振り返り表を作り、帰りの会の班会議で話し合う時間をもった。その結果、授業への集中力が高まっただけではなく、仲間がしっかりと聞いてくれることに喜びを感じる子どもが増え、それが社交性感覚を高めることにもつながった。

#### ②努力することの大切さを感得させる。

全員が宿題に確実に取り組むことができるように、取り組めなかった子どもは放課後、個別指導を繰り返し行いやりきらせるとともに、宿題を行うことの大切さを語った。また、丁寧に宿題に取り組んだ子どもの姿を学級通信で紹介するなど、こつこつと努力することの大切さに気付くことができるようにした。また、こうした努力が学業成績にも結び付くことを話し、努力することの大切さを繰り返し伝えた。

さらに、学習だけではなく、持久走大会の取り組みでは、毎日、休み時間や家でも練習している子どもの姿を紹介し、他との競争ではなく昨日の自分に勝つために努力することで、やりきる強い心を身に付けることができることを朝、帰りの会や学級通信を通して伝えた。このことで、努力することは、学業成績を伸ばすだけではなく、自分のやりきった満足感を得ることにもなることを感得させることになり、あきらめず努力する心を大きくし、学ぶ意欲を高めることにつながった。

子どもの生活ノートにも、やりきることで学ぶことが楽しくなること、努力をすることで自信がつくという思いが書かれていた。

『ぼくは勉強が楽しくなりました。前までは勉強が大変だから楽しくないと思っていたけれど、みんなに宿題が追いつくたびに楽しくなってきました。もう、みんなと同じところにいるから、また遅れないように頑張りたいです』

『今日、家に帰ってからテスト勉強をしました。すると、明日のテストに自信がついてきました。努力は自分自身の思いを変えることだと思います。だから、たくさん努力をして自分の思いを変えていこうと思います』

やりきらせるための教師の支援、努力できたことを認め励ますことで、子どもの学習への意欲が高まってきたことを感じる。

### (4) 自己受容感覚

4月、7月の学級経営チェックリストの自己評価から、教師は他の要素と比べ自己受容感覚をあまり意識できていなかったことがわかる。児童意識調査の結果でも、教師の結果と同じく低下しているが、4月に比べ7月の意識の低下が著しい。特に、「他の人に生まれ変わりたい」「私は、友達の言いなりになってしまうことがあります」という質問項目での低下が著しい。これは、自分を客観視できるようになった結果、友達と比べ自分のできないところに注目し、「他の人に生まれ変わりたい」という思いを強くしたためであると考えられる。また、高学年に近づき、友達という存在がますます大切になってきて、その関係に敏感になり、関係が崩れるのを恐れ、言いなりになってしまうことが多くなったことが考えられる。そこで、客観的な自己理解が進む中学年では、他との比較ではなく自分のよさや成長を自覚することが、「自分は自分でよい」という思いにつながると考え、学級経営チェックリストにある「他との比較ではなく、個の成長や努力を評

価する声かけ、態度を示しているか」を意識して、学級経営に取り組んだ。

その結果、4年生11月の児童意識調査では、3年生11月のそれと比較しても、自己受容感覚への意識が高まった。効果的であったと考える実践は、次の2点である。

①一人一人が自分のよさや成長を実感できる。

小学校は、学級担任制であるため、一日中子どもと共に過ごす。そのため、教師は一人一人の毎日の成長を見つけやすい。そこで、教師は児童観察から子どものよさや成長をメモとして残しておき、それを生活ノートの朱書きとして入れるようにした。「〇〇さんの素晴らしいところは・・・」「〇〇さんの成長は・・・」と、一人一人へメッセージを送ることで、自分のよさや成長を実感できる子が多くなったと考える。

また、仲間の目を強く意識するようになる中学年では、仲間同士で認め合うことを通して、自分のよさや成長を確認することが大切であると考えた。そのため、前述したように、仲間と定期的に認め励まし合う場を作る、仲間からの認め励ます言葉を教師が媒介して伝える等をした結果、自分のよさをしっかりと自覚することができるようになったと考えられる。

②グループエンカウンターを活用する。

自分や仲間のよさを見つけるため、グループエンカウンターを活用した授業を行った。学期初めには「さいころトーク」を行ったり、班を解体する時には、「別れの花束」というエクササイズを行ったりした。

自分では気付かないよさを仲間から教えてもらうことで、次への意欲につながった。以下は、「別れの花束」の授業後の児童の感想である。

『ぼくは、みんながよびかけをしたことをほめてくれて、ぼくの事を見ていてくれたから、もっとがんばろうと思いました』

『自分では気付かなかった自分のよいところを、みんながやさしい言葉で書いてくれたのでとてもうれしかったです』

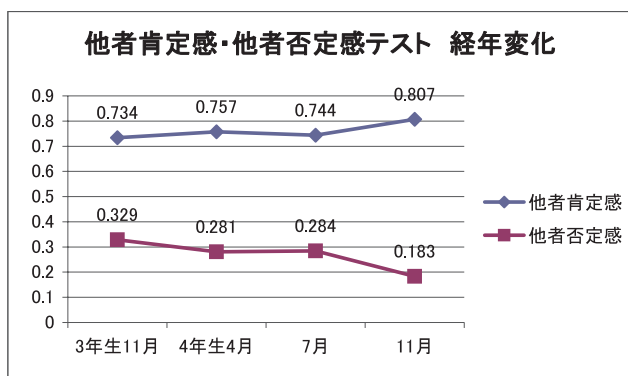
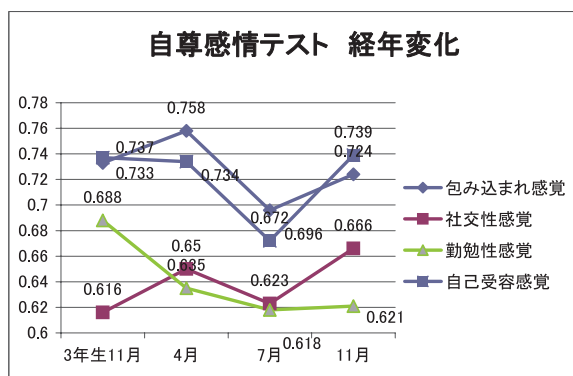
『私は何も役立たずだと思っていたけれど、こんなにいいところがあるとは思いませんでした。4班の思い出がいっぱいになりました』

仲間と認め合う場をもつことで、次への意欲がわき、自分では気付いていなかった自分のよさに気付くことができた子が多くいた。このような気持ちが、「自分は自分でよい」という自己の確立につながり、自己受容感覚が高まったと考えられる。

## 8. 検証結果

自尊感情の構成概念「包み込まれ感覚・社交性感覚・勤労性感覚・自己受容感覚」の4つの構成概念から自尊感情の変容を分析した。次のグラフは、対象学級児童（男子:16人、女子:13人）の意識調査（自尊感情テスト、他者肯定感・否定感テスト）の経年変化である。

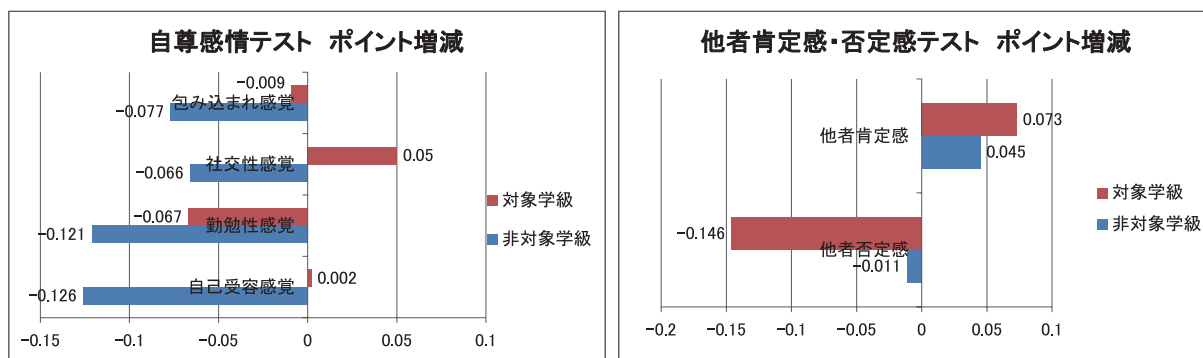
グラフ中の数字:自尊感情テストはそれぞれの質問項目に対して肯定的な回答をした合計を平均した値、他者肯定感・否定感テストはそれぞれの質問項目に対して「とてもそうだ・少しそうだ」と回答した合計を平均した値である。





先行研究、2010年に南小学校児童を対象として行った意識調査の結果からも、中学年以降自尊感情は低下を続けるということが明らかとなっているにも関わらず、自尊感情テストは、7月に低下した児童の意識が11月にはすべての構成概念で高まった。また、他者肯定感・否定感テストでも、11月には他者肯定感が高まり、他者否定感が低下している。このことから、他者を尊重する気持ちが育ってきたということがわかる。本稿では自尊感情の定義を「自分を価値ある存在であると感じ、自己と他者を尊重する気持ち」ととらえたことから、本研究は児童の自尊感情を育むために効果があったと考えられる。

次のグラフは、3年生11月と4年生11月のポイントの増減を示したグラフである。



3年生11月と4年生11月を比較しても、ほとんどの構成概念で児童の意識が低下しているにも関わらず、対象学級では、社交性感覚、自己受容感覚が高まっていることから、本研究は特にこの構成概念を育む効果が高いということがわかる。

## 9. 課題

以上のような成果がある一方、本研究には、次のような課題が残っている。

### (1) 学級経営チェックリストの評価基準の作成

学級経営チェックリストを作成したことによって、児童の自尊感情を高めるための手立てにつながる評価規準は明らかになったものの、評価基準は定まっておらず、自己評価をする場合もその判断が曖昧であった。発達段階によっても、その評価基準には違いが出るのが考えられる。今回の実践をもとに、自尊感情が低下する中学年から評価基準を作成していきたい。

### (2) 保護者への啓発のあり方

11月に行った保護者意識調査の結果では、4月と比べ、「子育ては楽しいことよりも、つらいことの方が多し」とする考え方が非常に増えた。「とてもそう思う」「少しそう思う」を足した数 4月:16.7%、7月:42.8%

これは、学年通信等の啓発によって、子どもへどのように接するとよいかはわかっているにもかかわらず、自身の子育てがそのようにならず、悩み苦しむ保護者の思いの表れであると考えられる。しかし、そのような思いは、保護者自身の自尊感情を低下させることにつながり、その結果、子どもの包み込まれ感覚の低下にもつながっていくと考えられる。今後、子どもの自尊感情を育むため、保護者に対してどのように啓発していけばよいかを考えていく必要がある。

### (3) 子どもに確かな自尊感情を育むことができたかを検証すること

本研究によって、学級担任が全教育活動を通して保護者と連携しながら、自尊感情に着目した学級経営を行うことで、子どもの自尊感情を育むことができることを検証することができた。自尊感情が低下する4年

生で今回の実践を行うことが、今後、思春期を乗り越える確かな自尊感情の基礎となったかを検証していくことが大切である。今後も検証を続けていきたい。

## 10. 終わりに

従来、学級経営は教師の主観的な判断に任されることが多く、その判断も一人一人の教師によって違っていた。特に小学校は学級担任制であるため、そのことが、学級間の格差を生むことにつながっていたと考える。

すべての学級で子どもの自尊感情を育む学級経営を行っていくためには、教師は、学級経営チェックリストのような評価規準から学級経営を定期的に評価し、児童意識調査など客観的な指標と比較検討し、学級経営の課題を見出していくことが大切である。そして、その課題を解決するため、児童観察、保護者との懇談等から改善の方策を考え、学級経営を改善していくことができれば、すべての学級で子どもの自尊感情を育む学級経営ができると考える。

子どもが自分を信じ、仲間を大切に自分の力で未来を切り開いていくことができるように、今後も子どもの自尊感情に着目し、保護者と連携しながら学級経営に取り組んでいきたい。

## 参考文献

- i 内閣府政策統括官（共生社会政策担当）編『世界の青年との比較からみた日本の青年 第7回世界青少年意識調査報告書』国立印刷局（2004）
- ii 『低年齢少年の調査報告』内閣府（2007）
- iii 古荘純一『日本の子どもの自尊感情はなぜ低いのか』光文社新書（2009）
- iv 池田寛『学力と自己概念』解放出版社（2000）
- v 遠藤辰雄・井上祥治・蘭千壽『セルフ・エスティームの心理学』ナカニシヤ出版（1992）
- vi 前掲 iii
- vii 前掲 iv
- viii 前掲 v